

述しており、学生にとって理解しやすい内容となっている。ただ、これは類書でも同じではあるが諸外国の部分は、医学史が中心であり、歯科医学（歯科医療）はその一部として記載されているに過ぎない。近代歯科医学は、ピエール・フォシャール（1678～1761年、フランス）によって創始されたが、これらが発展したのは、19世紀になってからのアメリカであり、世界で最初の歯科医学校が1840年にアメリカ・ボルチモアに設立されたことなどが、詳しく述べられている。

我が国では明治維新以前は、独自の歯科医療が行われてきたが、1873年の医制布達以降は、近代西洋医学を中心とした医療制度が導入された。その中で、歯科医療・歯科医学は、医療・医学の一分野として位置付けられていたが、紆余曲折を経て1906年に医師法とともに歯科医師法が制定・公布され、いわゆる医歯二元論が確立して、現在に至っている。そのような中で、わが国の近代歯科医学が、アメリカ歯科医学の影響を大きく受けて、発展してきた経過が詳しく述べられ、この点がヨーロッパ、特にドイツ医学の影響の強かった医学・医療とは異なっていることが明らかにされている。

戦後の諸制度の改革については、それらが占領軍の指導に基づいてなされたものであるとされているが、それ以前から改革の動きがあり、占領は

そのきっかけの一つであったに過ぎないとする説もあり、近現代史の課題とされている<sup>1)</sup>。医療制度についても同様であり、戦前・戦中の制度が、戦後になって新憲法の施行と前後して改廃されたり、新しい制度が導入されて、現在に至っていると考えられるが、本書では、この点は簡単に触れているに過ぎない。また、総論的な通史として書かれていることから、やむを得ないと思われるが、歯科医学の各領域がどのように進歩発展してきたかについても、記述は十分ではないと思われる。このような点については、現在の学生たちによく伝えるべき事柄であると考えられるので、今後、さらに充実されることを望みたい。

いずれにしても、本書により各歯科大学において歯科医学史が教育され、巻頭の中原泉学長の推薦の序にあるように「温故知新という知恵」が普及されることを期待したい。

#### 注

- 1) 雨宮昭一. 占領と改革 (シリーズ日本近現代史⑦). 東京: 岩波書店: 2008

(宮武 光吉)

[学建書院, 〒113-0033 東京都文京区本郷2-13-13, TEL. 03 (3816) 3888, 2009年10月, B5判, 115頁, 3,500円+税]

Gabor Lukacs:

## *KAITAI SHINSHO* The single most famous Japanese book on medicine & *GEKA SŌDEN* An early very important manuscript on surgery

日本の医学や古い書物に対する著者の深い関心が伝わって来る一冊である。フランス国立科学研究センター (CNRS) の元研究ディレクターであるルカシュ博士は、この本で日本医学史に残る2つの名著『解体新書』と「外科宗伝」を取り上げている。『解体新書』に着目した理由として、十

分に解明されていない6つの課題があると述べている (翻訳作業における杉田玄白の役割、扉絵についての詳細、西洋の図書館への伝達史、印刷過程の諸問題、現存資料の所在、当時の読者による手書きのコメントなど)。榎林鎮山の「外科宗伝」を選んだのは、先行研究の問題点を示すためとい

うよりも、その歴史的重要性が理由のようだ。

2つの書物は同じ手法で分析されている。『解体新書』を扱った第1部(1-180頁)では、まず底本の著者クルムスとその著作『ターヘル・アナトミア』の出版や翻訳歴について詳細に述べている。残念ながら、印刷の都合により石田純夫著『オランダにおける蘭学医書の形成』(2007年)の成果は、ここには反映されていない。第2章及び第3章では、『解体新書』の構成、図版、本文及び関連する人物、「扉絵」の諸問題について述べられている。第4章では『類経図経』の「内経図」及び『飲食養生鑑』を中心に「西洋の影響を受ける前」の身体観を概観した上で、『蘭学事始』など「蘭学運動」関連の基本文献を紹介し、西洋の解剖学に対する杉田玄白らの姿勢や認識を論じている。第7章は、近世ヨーロッパにおける『解体新書』の受容に関する初の分析であり、第8章から第10章にかけて、『解体新書』の出版歴を整理し、国内外の図書館などが所蔵しているものの特徴を確認している。現存資料の一部に見られる、近世の読者による傍注やコメントを詳細に分析した第11章は、『解体新書』の受容を考察する上で大変興味深い事例研究である。さらに、日本の医学における『解体新書』の短期的・中期的影響を論じ、一連の問題点を提示している。

第2部(181-251頁)では、著名な阿蘭陀通詞・榎林鎮山(1648-1711)に遡る写本「外科宗伝」を取り上げ、まずはその「底本」とされるパレの著作とパレについて概説している。「外科宗伝」の「金瘡跌撲図」に利用された洋書の図版を列記した第4章と第5章には、蒲原宏氏の先駆的な研究成果が盛り込まれている。第7章では「外科宗伝」の「仕掛書」の腫瘍名(題目)を根拠に、陣

実功『外科正宗』がその主な底本であるとする著者の持論が展開されている。写本である「外科宗伝」は様々な形で伝わっているが、第8章では、現存資料の所在とその内容の整理が試みられている。ここでようやく4つの部門(仕掛書、金瘡書・金瘡跌撲図、油之書・油取用書、膏葉書)からなる「外科宗伝」の全体像が明らかにされるのだが、もっと早い段階で言及しておいても良かったかもしれない。第9章で「金瘡跌撲図」を利用した伊良子道牛の『外科訓蒙図彙』を紹介し、第10章では、「金瘡跌撲図」の頭疵に関する記述をパレの説明と関連づけている。最後の短い3章は、榎林鎮山に関する「その他のコメント」や、大槻玄沢らによるパレの著作の翻訳及び「20世紀日本におけるパレ」に関する記述である。大量の写本資料の把握と整理は容易ではない。榎林鎮山及び「外科宗伝」を知らない読者には、本書の後半は多少読みづらいかもしれない。

日本における研究がまだ十分に反映されていないところも若干見受けられるが、欧文による紹介として、本書がこれまでになく総合的且つ詳細なものであることは間違いない。現存資料を粘り強く分析したルカシュは、様々な新しい発見を報告し、新鮮で興味深い提言と問題提起をしている。「外科宗伝」は、その煩雑さゆえに日本でも敬遠されがちであるが、すでに「一般的な書物」となった『解体新書』を新たな視点で見つめ直し、近世・近代における具体的受容に関する著者の提言と問いに向き合うことは、大いに意味のあることと思われる。

(ヴォルフガング・ミヒェル)

[Utrecht: Hes & De Graaf, 2008, 22.5×28.5 cm, 286 pp.]